

悪法の栄え：社会制度には耐用年数がある

政権が「国民が生き生きとして幸せになれる共同体を作る」という本来の目的を忘れると、一時期に権力を握った勢力も徐々に民心を失っていく。

政治的腐敗が進み、民心を得られない政権下では、市民も真面目に働くのが難しくなる。

こうして、一時期に権勢を誇った王国や文明は軍事力と経済力の両方をみずから手放す。その結果として、常日頃から存在していた危機に対処できなくなり、国家は崩壊するのだ。

国家が崩壊するときの悲喜劇は世界中で同じである。

特定の王国や文明が稚拙な国家経営によって弱体化したとき、まるで狙ったかのように危機（異民族の侵略、大災害と飢饉、内乱と革命などなど）がやってくる。これは当たり前の話である。すべての国にとって外圧は今この瞬間も存在しているのにである。常に危機は存在していて、政権が弱体化しないと危機は危機にならないだけだ。

弱体化した末期症状の政権は、さまざまな危機に対する無為無策無能ぶりをさらけ出す。それもそのはずで、世の中が変化し続けていて、危機への適切な対処法も変化しているのに、政権内で権力を得る人を選抜する方法は変わっていないためだ。

たとえば、歴史のある時代、ある場所では、ラテン語をマスターした人、聖書に通じた人、四書五経を丸暗記した人、字の綺麗な人、詩作が上手い人などが、当代最高のエリートとして処遇された。もちろん、こうした能力が通用した時代もあったのだろう。

しかし、もしも現代の公務員の選抜基準が民族語になったらどうだろうか。パソコンも使えない頭でっかちの人ばかりが公務員になるという恐ろしい結末が待っている。

日本の幕末においても儒学・朱子学を究めた幕僚たちは黒船来航に右往左往するばかりだった。むしろ黒船来航から続く外圧の危機に対処できたのは、当時最高の教養を誇っていた旗本・御家人ではなく、伝統的教養から比較的自由だった下級武士たちだった。

こうしたことから分かるように、制度と行政には耐用年数がある